

チャレンジキャンプ in ネイパル北見

1 事業のねらい

支援学校や支援学級に通う児童・生徒が、新たな仲間と様々な体験活動に取り組むことで、新たな気づきや交流の広がりを獲得し、将来に向け生き生きと過ごそうとする心を育む。

2 事業の概要

- 期日 R2.8.1(土)~2(日) 1泊2日
- 対象 支援学校等に通う小学生~高校生及び卒業生、その家族
事業趣旨を理解する支援学校等以外の児童生徒
- 人数 29名
- 場所 ネイパル北見
- 協力 小清水町教育委員会

3 プログラム

日時	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22
8/1 (土)							受付 12:30~13:00	受付	開 会 式	「ポツチャ」に チャレンジ	休憩	ピーチ コーミング	休憩 自由	夕食 (食堂)	キャンプ ファイヤー 花火	入浴・自由 就寝準備	就 寝
8/2 (日)	起床・準備	朝食 (食堂)	清掃 点検	シェルチャイム 作りにチャレンジ	昼食 (食堂)	ふり かえり	閉 会 式	解散予定 14:00 * 活動内容は、天候・人数、その他の事情により変更になる場合があります。									

4 ねらいを達成するための活動の工夫

- 参加者を不安にさせない環境づくり
 - ・ 事前資料を各家庭に郵送したほか、当日は施設の写真、プログラムの展開や時間の経過を写真で示すなどして、見通しを持って事業に参加できるようにした。
 - ・ プログラムの合間に休憩時間を設定し、参加者が余裕をもって準備したり、作業が長引いても融通したりして、一つ一つのプログラムにじっくり取り組むことができるようにした。
- 達成感を味わわせる創作活動
 - ・ 「シェルチャイム」づくりは、貝殻を糸で結んでつなげるなど、少し細かい作業だったが、ボランティアや参加者間の助け合いにより完成させるようにし、達成感を味わわせるようにした。

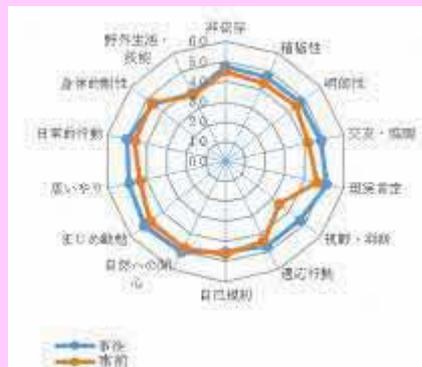


創作の材料となる貝殻を拾う



協力しながら細かい作業

5 事業の評価



■ IKR 調査による変化

- ・ 「視野・判断」が 1.3P、「交友・協調」「思いやり」が 0.6P 向上
- ・ 「積極性」は大きな変化なし

■ 参加者の声

- ・ みんなと遊んで楽しかった。また来たい。(子)
- ・ 障がい児を持つ保護者と交流でき参考になった。いろいろチャレンジさせたい。(保護者)

6 ねらいを踏まえた成果と課題

- 「視野・判断」が向上していることから、プログラムの展開や経過を視覚的に示すことにより、参加者が見通しを持って意欲的に活動できたと考えられる。
- 「積極性」に大きな変化がなかったことから、選択できるアクティビティを設置するなどして、発達段階に応じた対応をする必要がある。



企画のポイント

参加者の実態を踏まえ、見通しを持てるような環境づくりと、発達段階を考慮した活動

障がい者スポーツ交流会

1 事業のねらい

障がいのある方とない方が一緒に楽しめるスポーツを通して、障がいに対する理解を深めるとともに、多様性を認め合う社会づくりの醸成を図る。

2 事業の概要

- 期日 R2.12.12(土)～13(日) 1泊2日
- 対象 小学3年生～中学3年生
- 人数 20名
- 場所 ネイパル厚岸、厚岸町B&G海洋センター体育館
- 協力 高瀬 勝洋氏(釧路市社会福祉協議会阿寒支所長)
武田 豊氏(車いすバスケットクラブFREEZZ代表)

3 プログラム

	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22
12/12 (土)								受付	開 会 式	講演	パラスポーツを 体験しよう 車いすバスケ・ポッチャ		移動	夕 食	入 浴	就 寝 準 備	就 寝
12/13 (日)	起 床	朝 食	部 屋 点 検	ユニバーサル デザインの スポーツ		閉 会 式											

4 ねらいを達成するための活動の工夫

- パラリンピアン、パリンピックコーチ経験者の講話・交流
 - ・障がい者スポーツに関する実績や社会福祉分野の経験が豊かな講師による講話・交流によって、障がいやパラスポーツの現状について学びが深まるようにした。
- 多様性・共生社会について考えるアクティビティ
 - ・参加者同士で意見を出し合っゲームのルールを工夫し、参加者相互が「誰もが楽しめるスポーツ」を考えることで、多様性や共生社会について学べるようにした。

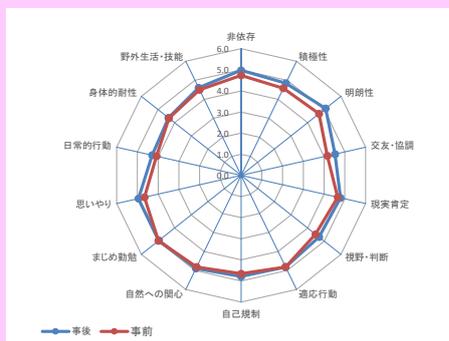


車いすバスケットボールの体験



多様性を考えたスポーツ交流

5 事業の評価



- IKR 調査による変化
 - ・「明朗性」「交友・協調」が 0.4P、「積極的」「思いやり」が 0.3P 向上
- 参加者の声
 - ・ルールを少し変えるだけで誰でもスポーツができることがわかった。
 - ・普段でも、小さな子どもと仲良く遊べるように工夫したい。

6 ねらいを踏まえた成果と課題

- 「交友・協調」「思いやり」が向上したことから、ルールを話し合う際に、「手や足が不自由な人がいたら？」など、様々な場面を具体的にイメージすることで、「共生社会」について思いを巡らせることができたと考えられる。
- 共生社会について効果的に学ぶため、関係機関や団体と連携するなどして、障がい者当事者が多く参加できるような環境づくりが必要である。



企画のポイント

障がい者当事者の講話・交流のほか、ゲームづくりを通して共生社会を考える活動